

今だから考える馬の役割

—広がる馬の存在価値—

多様化する馬の役割

—馬産の新時代—

北海学園大学 古林 英一

ばんえい競馬存続がもたらしたこと

昨年（2006年）秋、ばんえい競馬の存廃が全国的に報道された。一地方競馬の存廃問題としては異例の大きさの報道であった。

廃止やむなしという流れを逆転させ、帯広市をして存続に踏み切らせたのはソフトバンク系企業オズパーク社との業務提携であったが、その背景にはばんえい競馬の存続を求める馬産・競馬関係者と帯広市を中心とした強い市民の声があった。

積極的な街頭署名や全国への呼びかけを通じてばんえい存続に向けた世論形成に市民グループが果たした役割は大きい。市民の声がばんえい競馬を存続させるに至らしめたということは、やや大げさかもしれないが、これまでのわが国の馬産・競馬の歴史のなかで画期的な出来事であったといえよう。

ばんえい競馬存続運動を担った市民は、馬券の購入という意味での競馬ファンでは必ずしもなかった点に注目したい。市民グループと帯広市は、ばんえい競馬とばん馬（農用馬）を地域活性化の資源として位置づけることで、ばんえい競馬の存続を提起

した。

ここでの提起には2つのことがらが含まれている。1つは産業動物としての役割を終えて久しい馬に新たな活躍の可能性が与えられたこと、いま1つはこれまで事実上馬券収入のみを目的とする競馬、いわゆる「財政競馬」の桎梏（しっこく）から競馬という営みを解き放つ可能性を見出したことである。後者については稿を改めて論じることにしたいが、元々この2つは無関係ではない。

競馬という営みは選抜淘汰による馬事改良を目的としている。馬事改良とは産業動物としての馬の改良に他ならない。従って、産業動物としての馬の役割がその歴史的使命を終えたとき、より速くより強いサラブレッドの創出というスポーツ的な意味での馬の改良はありうるとしても、産業政策としての馬の改良は社会的意義を失い、ひいては競馬の名目的な目的は実態を喪失した。その結果、競馬の根拠として残ったのは、単なるテラ銭稼ぎ＝財政競馬でしかなかったのである。

産業動物から競走馬へ

馬政局という内閣直属の官庁が設置され

日本人と馬のかかわりには長い歴史がある。その中で、かつては軍馬としての役割が主であった馬が、現在では競馬や乗馬といった趣味的要素の強いもの、また農耕馬として現在も農作業の担い手として活躍するもの、そして古くからの神事や祭りなど、地域に根ざした文化を守り続けるもの、さらには馬肉などの食文化として広く普及しているものなど、幅広い役割を果たしている。

このように、馬の存在意義が多様化している背景には、われわれ現代人の価値観も多様化していることも関連しているのではないだろうか。

そこで「畜産コンサルタント10月号」では、広い視点から「馬」を取り上げ、現代における馬の役割を考えてみる。
(編集部)

たことからもうかがわれるように、馬事改良は他の畜産振興政策一般とは一線を画する重要な国策であった。

その背景には軍馬改良があったことはいうまでもないが、今の自動車がそうであるように、馬はほとんどすべての産業領域において使役されていた重要な産業動物であった。

農業の分野では近世末期九州北部で始まった乾田馬耕は明治期には東日本に普及し、農業生産力を高めるのに役立った。また、北海道開拓は馬なくしては成り立たなかったろう。

北海道の広大な原野を開墾するためには非力な和種馬では効率が悪い。フランスから導入されたペルシュロン種による品種改良は北海道開拓に多大な貢献を果たした。基礎種雄馬として明治末期に政府が購入したイレネー号は、今日でも帯広競馬場正門脇に建てられた銅像や、ばんえい競馬のビッグレースであるイレネー記念としてその功績が顕彰されている。北海道開拓と馬といえば農耕馬が注目されがちであるが、炭鉱、森林伐採、運輸、港湾作業など、あらゆる産業現場で馬が使われたことは見逃せない。数からいえば農耕以外の方が多かったのではないだろうか。

第2次大戦直後から、モータリゼーションがあらゆる産業を席卷するまでの十数年が戦後の馬の活躍期である。戦後まもなく復活した地方競馬は産業動物としての馬の改良・生産振興を目的としていたが、これはあながち名目的なものではなかった。

例えば、1960年ごろまでのばんえい競馬はさまざまな産業現場で活躍していた馬と人が腕と力を競うものであった。ばんえい競馬に限らない。古い道営競馬（北海道地方競馬）の出走表をみると、サラブレッドやアラブといった軽種馬はわずかで、大多数はアングロ・ノルマンや中間種である。鹿児島で農耕に使役している馬を佐賀競馬に連れて行ったという話を聞いたこともある。

産業動物としての役割を終えた後、北海道の馬産は2つの道をたどる。興行収入が十分に確保できるようになった中央・地方競馬では、競走専用の軽種馬の需要が増大する。それに対応して北海道の日高・胆振地方では軽種馬生産が産業として確立していく。その一方で十勝・釧路地方などでは趣味的・副業的なかたちでの農用馬生産が中心となっていく。

北海道でしか開催されないばんえい競馬での競走馬需要は年間200頭程度に過ぎない。それでも今日でも3000頭近い農用馬が生産されているのは、馬肉需要が生産を下支えしているからであり、このことが趣味的・副業的なかたちとはいえ、農用馬生産を今日まで行わしめている要因である。

また、ごく一般的に言えば牽引力は馬格が大きい方が強く、肉用モト馬として販売する場合でも大きい方が総じて高い。これら両方の要因があいまって、農用馬の馬格は20年ほどのあいだに飛躍的に向上した。1960年代半ばころであれば馬体重が800kgもあれば大型馬であったが、現在のばんえい

い競走馬の馬体重は概ね11前後であり、大きいものだと1.21を超える。

馬利用の多様化

英語に「hippophile」という単語がある。手元の英和辞典には「愛馬家、馬好き」と記されているが、単なる愛馬家とか馬好きというレベルではなく、馬のことになると夢中になって他事を忘れるような人たちを意味する言葉だと、ある馬関係者に聞いたことがある。

hippophileはわが国にも少なからず存在している。そもそも日本ウマ科学会などという学会が存在すること自体がhippophileの存在を裏付けている。ちなみに日本ウマ科学会の和文誌の誌名はそのものずばりの「Hippophile」である。

馬には他の家畜にない魅力があるようである。それがhippophileたちを生み出す原動力となっている。加えて、馬に郷愁と愛着を感じる人々が北海道には少なからずいる。

ばんえい競馬存続のための署名活動を



(写真1) 札幌市内で行われたイベントに参加するリッキー号

行った際には、「懐かしい」「昔うちでも飼っていた」という中高年の人々に少なからず出会った。写真1はばんえい競馬のマスコットホース・リッキー号が、札幌市内で行われた十勝観光連盟のイベントに参加したときのものである。子どものみならず大人にも大人気である。リッキー号は文字通り十勝観光の広報マンとして大活躍している。

北海道に限らずわが国にもhippophileが数多く存在し、馬に魅入られ、馬とともに生きようとする人たちも多い。そうした人たちによって、産業動物としての時代には存在しなかった活躍の場が馬に与えられるようになってきている。その代表的なものが乗馬であろう。

もちろん乗馬そのものの歴史は古いが、一般市民のレジャーとしての乗馬の歴史は新しい(写真2)。かつてのわが国の乗馬の担い手は軍人や一部の上流階級であった。今日では、フォーマルなブリティッシュスタイルから、比較的自由的なウエスタンススタイル、さらにホーストレッキングまで、多種多様な乗馬を各地で一般市民が体験できる。

また、愛がん動物がペットからアニマルコンパニオンという呼び方に変わってきたことからもうかがわれるように、動物とのふれあいの効用が意識されるようになり、ホースセラピーがわが国でも徐々に普及しつつある。

加えて、相馬野馬追(本誌グラビア参照)や、東北地方の馬力大会など、馬を使った神事・祭事も見過ごせない。

馬肉もこの数十年で変貌を



(写真2) 一般市民に普及しつつある乗馬

とげた。馬肉が伝統的郷土食として不動の地位を築いている地域もある。今では信じられないことだが、今日の馬肉王国熊本でさえ、夏目漱石『三四郎』が描く明治時代末期には、馬肉は牛肉のまがい物的存在に過ぎなかった。ハム・ソーセージ原料として馬肉が大量に輸入された時代もあったが、今日では生鮮向けが中心となり、馬肉は食肉としての地位を築いている。

馬による地域活性化の模索

ばんえい競馬存続運動を契機として、北海道十勝では馬を地域活性化の資源として活用するために、2007年春、NPO法人十勝馬文化を支える会が発足した（NPO法人の認証は2007年8月）。会の名称は十勝馬文化を支える会であるが、会員募集は十勝に限らず広く全国に向けて行っている。詳しくは十勝馬文化を支える会のWebサイト（<http://umabunka.com/>）を見ていただきたい。

この会は直接的にはばんえい競馬の支援を意識して設立されたものだが、乗馬関係

者をはじめとして、多種多様な人々が参画し運営されている。ばんえい競馬という世界に類例のない競馬を中核として、多種多様な馬にかかわる人々が集まり、馬による地域活性化を図ろうというのが会の目的である。

ばんえい競馬以外のイベントとしては、7月に純血アラブ種飼養者による「2007ピュア・アラビアンホース・フェア」が行われ、馬インフルエンザ流行によって中止となっ

てしまったが8月にはウエスタンホースフェア2007が企画されていた。さらに9月下旬にはかつての馬耕を再現する馬耕まつりが企画されている。

また、十勝馬文化を支える会とは関係はないが、北海道上ノ国町には、馬による山林作業の技術伝承を目的として、農用馬飼養者と森林ボランティアによる馬を使った森林作業が行われている。地球温暖化防止を契機に森林保全に対する意識が高まっているなか、森林の管理・保全にドサンコ（北海道和種馬）の活用を提唱している研究者もいる。

まだ始まったばかりであり、今後の活動を注目せねばならないが、十勝馬文化を支える会はこれまで個々に営まれてきた馬にかかわるさまざまな動きを組織横断的に連結させ、それを地域全体の共有資源として活用することを志向している点で画期的な試みであると思われる。こうした試みが全国に拡大していき、新たな馬文化の担い手が生まれることで、わが国における馬の新時代が始まるであろう。

（ふるばやし えいいち・北海学園大学教授）